月刊

立川と語ろう　立川に生きよう

えくてびあん

5

<EKUTEBIAN-VOL.6. MAY. 1989-EKUTEBIAN>

まい　あーと■粘土細工「遊」
by 宮本香世子

春

この街の南、羽衣町の一角をかすめて「矢川」が流れている。わずかに1キロ足らずで国立市へと流れ去ってゆくが、ここには別天地のように自然が息づいて春ともなれば鳥は啼き、花咲きみだれ、子供たちは水と戯れる。この子たちはおおきくなっても決して「春の小川」を忘れないであろう。

撮影●鈴木功＋原田孝一

矢川博物誌

▲コナギ

▼草原が一面に広がる

▲カミキリムシ

▼ジョウビタキ

▶レンギョウ

▶コゲラ

◀ユキヤナギ

◀ハクセキレイ

▲ミゾカクシ

▼ベニシジミ

▲春の足音、湧水が高鳴り、草木は力強く芽吹く

▼キセキレイ

漢字テスト40
空欄に一字挿入を試みよ。
▶万緑●紅
▶琴瑟相●

▲斎藤俊委員長により開式された

▲委員長をはじめ、青木久立川市長、深井賢一立川駅長ほか、来賓諸氏により、テープカットが行われた。

立川駅、未来への出発

立川市、立川駅、諸団体がひとつになり、立川の新たな出発を祝った。

平成元年四月八日、立川駅南北自由通路において「立川駅開設百周年」の記念式典が行われた。あいにくの天候ではあったが、多くのひとが参加した。青木立川市長をはじめ多くの来賓のなか、立川駅開設百周年記念実行委員会委員長斎藤俊氏(商工会議所会頭)により式辞がのべられ開式となった。

催しにも工夫がされ、開業当時の様子から現在の様子までひとめでわかるタイムトンネル100年や未来の交通機関、未来の立川を模型やパネルで展示したコーナーなど人々の関心を集めていた。また、自由通路南口側では、ミニコンサートが、ホームではミス立川が「一日駅長」として奮戦していた。

▲開業当時のさまざまな品が展示

▲J.R職員もビデオ片手に会場から会場へと

▲4月11日生れの子供たちが1日駅員に

▲国立音大生のブラスによるミニコンサートも

「全国ミニコミ展」に本誌も参加

今、"街おこし"の努力がいろいろな地域でされているが、そのための各地域間の情報交換、連帯が次第に活発になってきている。去る3月25・26日の両日、香川県高松市で開かれた「第1回生涯学習フェスタ」もその一つ。その一環としての「広げよう学習ネットワークの輪―全国ミニコミ展―」に本誌も参加。各地との交流をさらに深めた。

長い間、ご愛読いただきました「駅長列伝」は先月号で終了。次号からは新シリーズ「えくてびあん/エア・メール・ボックス」がスタートします。世界各地で活躍中の立川人の方々から寄せられた"おたより"が連載されます。ご期待下さい。

青葉が萌える、立川の春

東京都農業試験場は、大正13年に中野から立川に移転され、数多くの研究がなされてきた。ここには植物のことなら……といった、プロのなかのプロたちがいる。その研究の様子をうかがってみた。

花き●橋本貞夫さん

立川で主に研究されているのは、シクラメン・プリムラ・鉢菊・ハボタンですが、八丈島・小笠原諸島での観葉植物生産とタイアップした研究も行われています。最近"開かれた農業試験場"ということが内外ともに浸透してきまして、地域への対応が色々な面でされています。たとえば、福祉会館のシルバー大学や地元での園芸教室開設などです。また、東京と友好都市の北京では、革命40周年記念式典が10月に行われ、メイン会場の天安門広場には菊が何万本と飾られますが、これもこの農業試験場のプロジェクトが研究開発した品種の菊が使われます。

果樹●川俣恵利さん

果樹研究をしてまして、まあ、果実といったほうがいいかな。果実も人間と同じで住んでいる所が違うと味もそれぞれに違う。過去には、ぶどうで「高尾」、梨では「多摩」が生まれました。その土地に適した品種だけに味の個性が豊かだね。それと土質だけではなく、新種を作った人の個性がその木に現われるのもおもしろいね。果実の善し悪しも見てわからなきゃね、着色がいい(甘さ)ふっくらしている(肉質がやわらかい)艶がいい(こくがある)、これがわかれば、いつもおいしいものが食べられるよ。20年この道にいてなんでもわかると思ったが、奥が深いね。

植木●加藤禎一さん

植木の研究室にきて15年程になりますかね。最近はモダンな建物が増えてきたせいか、植樹の主力品種も外国のが多くなりましたね。近頃重宝がられている、北米原産のハナミズキや、立川の木、欅が歩道・公園で良く使われてます。信じ難いでしょうが、生産高や面積では東京は全国7位ぐらいの位置にありますし、カバープランツといって土を這う植木では、全国の半分を生産してます。東京の意外な一面ですね。景観や緑陰の良さを出すには、10年単位の時間がかかるのがネックでね。長い時間がかかるため、流行をおわず質の高いものを作るのが大切ですね。

野菜●野呂孝史さん

立川の野菜といったら、あまりにも有名になってしまった"ウド"。日本一といってもいいでしょうね。もうひとつ伝統からいくと"トマト"が以外ではありますが研究されていまして、過去に3種類の新しい品種が生れています(あずま・東京NFVR・ふじみ)。新しい品種が生れ出るには10年からの時がかかります。新作を作るには、おいしいトマトの定義づけをし、それに向かって予備試験を繰り返し行う。しかし、若さ・体力、そして固定観念にとらわれない自由な発想が必要のようですね。時代の流れとして野菜の養液栽培もこれから行われる研究です。

表紙は語る

まい あーと●粘土細工「遊」by宮本香世子

「やり始めはなんとなく本を見ながら粘土をこねていました」と砂川4丁目に住む宮本香世子さん。

「ある時友人から電話があって、創作人形の学校で資格をとったわよ、という連絡が入りましたので、教えてもらうことにしたんです。やっぱりひとりで粘土をこねているより、ずっと緊張感があるせいか、いいものが出来てきましたね。なにか、手先から新しいものが生れてくるって感じです。柔らかいものが、コチョコチョと形になって固まると、今までなかったものがうまれる。とっても豊かな気分になりますね。白い人形に今度は色を付けるんですが、付けるというより着せるという感触です。でも色は苦手で着せたい色がなかなか出ないので苦労しています。自分の使える色が決ってしまっているので、街のなかや絵本、先生の作品なんかを見ながらこんどはこんな服を着せてあげようと、いろんな色をためています。今まで観察する機会が少なかったから、こうしてひとつひとつ作っていますと、見る目がなにか養われてきた気がします。観察力がついてきたんでしょうか。子供も時にはやるのですが、つい色々といいそうになりまして…。遊び心で作るということが大切じゃないかなと思いますね。作ったものは、ほしい方にあげてしまいます。私はこれを"嫁入り"といってるんですが」。ちなみに、ウサギは宮本さん初めての作。

真如苑だより

イタリアへ旅行へいった日本人が、あまり天気がいいので「素晴らしい日本晴れですねぇ」と云ったらガイドさんが「いえ、これはローマ晴れです」という話があります。今月も「五月晴れ」の真如苑へどうぞ!

■日時　5月15日(月)　午後2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。
■立川市民(成人)に限らせて頂きます。
■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

立川クイズ

わが街の北部を流れる玉川上水、つくられたのは一六五三年、当時の水道としては世界一の規模だったそうな。勿論、江戸の人々の飲み水を供給するのが目的でしたが荷を積んだ船を通して、水運として利用した時もありました。さてそれはいつ頃のことでしょう。

①江戸は元禄の頃　②明治維新直後　③大正の初め頃

【先月号の答】②
甲武鉄道の開通は明治22年4月11日、小金井公園の花見の時期にあわせるため開業を急いだのだとか。

工房から

●立川駅百周年記念式典での祝辞で、おおくの方から「過去の百年も大切だが、これからの百年を見守ってゆこう」という趣旨のお言葉があった。当り前なことだが、人間の眼は前を見るようにできているようであります。●式典に集まった方々は、この街をこよなく愛し、この街に長く住んでいる方々ばかりであったが、それでも「停車場」が出来たその当時を、この眼で見た人はひとりもおられない。もし、おられるとしたならば、その方は百歳をこえておられる勘定になる。●年どしに自然が破壊されていることは否定できないが、ようく観ると天然はやはり息吹いている。とくに春爛漫ともなれば矢川をご覧ください。●きらきらと　八十八夜　えくてびあん

(編集)石塚敦美　小川知子　神山清子　勝川輝　田中恵子　添上麻理　半沢正弘　原田悦子
(写真)天野武男　板橋一明　吉田義治
スタジオ269

漢字テスト・答え

万緑一紅(ばんりょくいっこう)
"紅一点"。即ち多くの男性の中、唯一の女性"転じてきわめて際立った存在。

琴瑟相和(きんしつあいわ)
琴と瑟とを合奏すると、その音色がよく調和することから夫婦円満をいう。

月刊えくてびあん　第58号
平成元年五月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
パークビューハイツ501　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　(株)大廣社

あーとさろん（えくてびあん）

会話にふとセリフをはさむ、その瞬間に役になりきっている。何気ない仕草がもう"舞"のポーズだ。虚と実の間を瞬時に往ったり来たりの役者や舞踊家の人たち、こうなると、もうどちらが本当の自分なのか……。

堀江けんいちさん・畑野旭子さん

▶周囲の反対を押して舞踊家を目ざし勘当された事もある堀江さんと幼い頃から舞踊に生きてきた畑野さん。クラシックバレエ一筋のご夫妻、今は振付にも力を注ぎ、力をあわせて創作舞踊を多数発表している。今年の作品は「ピノキオ」。（柏町）

五井輝さん

▶自らを"舞人"と呼ぶ。モダンダンスから舞踏の道へ。他を排する訳ではなく、どこまでも自身の舞を追求するため現在は常にソロで舞う。木喰上人を描いたテレビ作品に主演する等、活動の幅が広い。（高松町）

石神帆次さん

▲生き方を模索していた高校の時舞台を観て感動、演劇を志す。劇団「青年劇場」を経て仲間と「シアター２＋１」を結成。理想の演劇を追い続けて今年10周年、この秋にはブルガーコフ作「犬の心臓」をわが国で初めて上演する。（柴崎町）